12月13日

職員朝礼校長より9

自分の前提を問う。そのためには前提を揺るがし、壊すようなものに触れさせなければならない。その中で回路がつながり、新しい世界の住人になっていく。これが学びです。

では学び続け、問い続け、考え続けさせるにはどうしたらよいか。

「分かる喜び」ではなく「分からない喜び」を体験させる。授業が終わったときに深いところで「分からん」という言葉が生徒の口から出るような、そういう授業をめざす。

考え続けるのはどこまで考えても分からない深いものに触れるためであり、どこまで考えても分からないものに触れるのは考え続けるためです。そうして人生の終わりに死を迎える場合でも、分かって死のうとするのではなく、分からなかったけれど、なんか楽しかった、そういうことではないかと思えます。

付記

職員朝礼後、ある先生から「じゃあ、東大の入試問題みたいな難しい問題を出せばいいってことですか」と聞かれました。また他の先生からも、昔「七輪」という言葉を生徒に出させようとして苦労したのだけれど、結局「分からん、面倒くさい！」と生徒が探究をあきらめてしまって、悲しい思いをした、という反論？がありました。

むずかしいですね。どう考えましょうか。例えば数学の分からなさは問題の難しさの分からなさということではなく、数学自体の分からなさ、奥深さのことではないでしょうか。例えば三平方の定理でも、これを発見したのはピタゴラス派だと言われていますが、彼らは線が点からなっていると考えていましたから、大きな困難を抱えてしまうこととなります。無理数の問題です。有理数と無理数の問題、点と線の問題は分かっているようで、難しいのではないのでしょうか。

もう一つの「分からない」は探究の放棄につながる「分からない」です。たしかに教える側からすると、これは悲しい。生徒の側からするとこれは「分からない」という仕方だけりを付け、言わば答えを出し「分かった」ことにしてしまったといえます。そこで問題となるのは、どこまでも分からないけれど探究せずにはいられない、そうした課題を生徒に提示することができるか、ということですが、ここが一番難しいところであり、これこそ教師の仕事だと言えらると思えます。

それにしても忙しい朝のちょっとした時間にもこうした会話ができる職員室、先生方ってすごいなあ、と思えます。